

教 育 研 究 業 績 書

2024年 3月 27日

氏名 吉村 親

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
教育学、社会・開発農学、環境農学	農業体験学習、食農教育、農村社会、都市農村交流、グリーン・ツーリズム	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1. 農山村地域でのフィールドワーク及び報告会の開催	2021年6月～現在に至る	静岡県立農林環境専門職大学生産環境経営学部を展開科目「農山村デザイン演習」は、農山村において地域住民と交流し、その体験を通して地域や住民が抱える課題を確認し、その課題解決策について検討を行い、最終的にはその成果を報告することを目的としている。学生全員で1つの農山村地域のフィールドワークを実施する場合、各学生の主体的な関りや学習効果が十分に得られないことを考慮し、4班で4地域（浜松市、磐田市、掛川市、森町）でのフィールドワークを実施している。その後4市町の地域住民やその関係者等を本学に招き、フィールドワークを通じた学習成果についての報告会を実施している。 [新聞記事掲載等] ・静岡新聞「農山村の魅力と課題探索 農林環境専門職大生が実地調査報告（2024年3月11日）」他5記事 ・中日新聞「農林環境専門職大生が掛川滞在学习ぶ（2022年9月8日）」他2記事 ・静岡第一テレビ（newsevery.しずおか）「町民有志が取り組む活性化策に大学生が参加新たな特産物”梨ビール”作り開始（静岡県森町）」2021年9月7日 ・NHKニュースたっぷり静岡「農山村地域の課題解決へ農林業を学ぶ大学生が掛川で調査」2022年9月7日 ・広報もりまち「鍛冶島の未来を考えるワークショップ開催（令和5年11月号）」他4記事
2 作成した教科書、教材 1. アカデミック・スキルズー学びのてびきー	2021年1月	大学の学びの手引書（高校と大学の学びの違い、授業やレポート作成、議論・発表の要点、図書館の利用方法、メールを含めたインターネット情報の活用方法、本学独自の様々な実習での学び方や学生が守るべきルールとマナーなど、大学における基本的な学び方について）の作成における編集委員を担当した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1. 札幌市民に対する食育学習会における企画・運営・講師 2. 北海道土地改良事業団体連合会石狩支部職員部会研修会における講師 3. 札幌市立茨戸小学校の食育活動における指導及び講師 4. ボランティアコーディネイト研究会における講師	2007年1月2008年3月 2007年2月15日 2007年6月2007年12月 2007年8月23日	安全・安心・おいしい料理を研究している「真味の会」の参加者を中心に、生産現場から食材や健康を考える学習会を企画して講師を行った。 「都市と農村の交流から広がる食育のネットワーク」の題目で講演を行った。 稲栽培などの指導を行った。また、1年生の親子を対象に調理実習を交えた学習会に講師として参加した。 「都市農村交流実践における地域住民の学習過程～「農業小学校」を事例に～」の題目で講演を行った。

事項	年月日	概要
5. 農業小学校研究会の企画・運営	2008年2月15日	北海道の3カ所の農業小学校の実践者と「北海道農業小学校研究会」を立ち上げ、初めて実践者同士の交流を行った。また、各実践報告を行い、農業体験を中心に学習を深めた。 [新聞記事掲載] 2008年2月19日 十勝毎日新聞「農業小学校連携で初研究会」
6. 新潟県立山潟小学校3年生の総合的な学習の時間への協力	2012年6月～ 2013年9月	2012年度及び2013年度に新潟農業・バイオ専門学校において、農業体験（大根のは種、間引き、収穫）の受入れを行った。また、そのまとめとして「もっと知りたい農業のこと」の題目で授業を行った。
7. 大学生の農業インターンシップの企画・運営	2016年4月2018 年3月	いわて農業キャリアデザイン支援研修の企画・運営を担当した。研修期間は5日間で、受入先は各年度3経営体を設定し、参加者と受入先の調整や研修当日の支援、研修最終日には就農ガイダンスを実施した。参加人数は、2年間で17名。
8. 新規就農に関心がある大学生等を対象にした短期農業体験の企画・運営	2016年4月2018 年3月及び2019 年4月～2020年3 月	新鮮いわて農業チャレンジ体験研修の企画・運営を担当した。研修期間は1日～3日で、受入先は2016年度5経営体、2017年度及び2019年度は20経営体を設定し、参加者と受入先の調整や研修当日の支援、研修最終日には就農ガイダンスを実施した。参加人数は、3年間で約60名。研修参加者の数名が、新規就農や長期研修（農業次世代人材投資事業の準備型活用）につながっている。
9. 地域定着に向けた「いわてのインターンシップ」勉強会における講師	2016年10月13日	パネルディスカッションにおいて、農業分野における“地域志向型インターンシップ”の運営と課題について紹介した。
10. いわて“GOOD JOB”カレッジにおける講師	2017年9月13日	若者の就労支援に携わる方を対象とした研修会の岩手の産業を知る講座「農業・林業編」において農業分野（主に新規就農、農業インターンシップ）の講演を行った。
11. いわてアグリフロンティアスクールの企画・運営	2018年4月2019 年3月	農業者等が、農業経営、6次産業化、地域活動等を1年間学ぶ本スクールの事務局を担当した。本スクールは、国際競争力のある高生産性ビジネス農業を育成すべく、経営感覚・企業家マインドを持って経営革新、地域農業の確立に取り組む先進的な農業経営者を養成する1年制のスクール。2013年度から岩手大学、JA岩手県中央会、岩手県で運営協議会を設置して運営している。2018年度は事業の見直しの時期になることから、次年度以降のカリキュラムなどの検討も担当した。
12. 未来のワタシゴト創造プロジェクトにおけるアドバイザー	2019年8月8日～ 9日	岩手県内の高校生や大学生等に向けて、業界（農業分野）の現状や取り組み、未来の岩手等について紹介した。その後のワークショップでは、新規就農に関するアドバイスを行った。
13. 地域志向型インターンシップ情報交換会における講師	2020年1月28日	新鮮いわて農業チャレンジ体験研修、農業インターンシップ（全国農業会議所）等の農業系インターンシップについて紹介をした。
14. 静岡県立藤枝北高校2年生進路ガイダンスにおける講師	2021年1月25日	分野別キーワード研究ガイダンス（農学）において、「食農教育、グリーン・ツーリズム、農福連携」の説明を行った。
15. 令和3年度ふじのくに美しく品格のある邑「邑づくりワンストップ窓口（西部地域）研修会」における講師	2021年11月18日	静岡県西部の農家や関係機関の職員を対象に「これからの農業・農村体験の可能性」の題目で講演を行った。

事項	年月日	概要
16. 令和4年度静岡県グリーン・ツーリズム協会通常総会における講師	2022年6月8日	県内の農家や関係機関の職員を対象に「農林業の担い手育成における大学と地域連携の構築に向けて」の題目で講演を行った。
17. AOIフォーラム会員視察バスツアーにおける講師	2022年11月29日	県内の農家や関係機関の職員を対象に「農業・農村体験における相互学習」の題目で研究・教育紹介を行った。
18. 静岡県立浜松江之島高等学校2年生の学校見学会における講師	2024年2月9日	静岡県立農林環境専門職大学の講義紹介として「農業・農村の設計と各種制度」の説明を行った。
5 その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格, 免許		
1. 教育免許状高等学校専修免許状 (農業)	2008年3月	北海道教育委員会 平19高専修 第0238号
2. 教育免許状高等学校専修免許状 (家庭)	2008年3月	北海道教育委員会 平19高専修 第0237号
3. 教育免許状中学校専修免許状 (家庭)	2008年3月	北海道教育委員会 平19中専修 第0126号
4. 園芸福祉士	2020年10月	NP0法人日本園芸福祉普及協会 11-101
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 北海道遺伝子組換えコンセンサス会議道民委員	2006年11月～2007年3月	会議の結果は、北海道内での遺伝子組み換え (GM) 栽培を推進するか、反対かについては意見がまとまらず、提言は①「クリーン農業を掲げており、栽培には慎重でなければならない」、②「農業経営者の負担軽減などから、導入が望ましい」、③「栽培は必要か否かすぐに結論が出ないため、今後も徹底的に議論する」、④「栽培するかどうかの選択は先送りにする」の4案を列挙する形となった。しかし、現時点では消費者の理解を得られていないこともあり、道として結論を急がないよう提言 (第3回北海道食の安全・安心委員会) することにした。 [雑誌掲載] 生活と自治「特集 科学との新しいつきあい方」NO. 463 (2007年11月号) 生活クラブ事業連合生活協同組合連合会, P9～11
2. 札幌市札幌市食育推進会議委員	2007年7月～2008年1月	札幌市食育推進計画策定、食育推進計画の重点取組みと目標、「札幌市食育推進計画(素案)」に関する市民意見募集(パブリックコメント)の結果報告書、札幌市食育推進計画案等の検討を行った。
3. 森町ツーリズム研究会森町でつながる推進部会アドバイザー	2021年6月～現在に至る	地域資源を活用したグリーン・ツーリズムの展開や地域活性化等の取組、町内農産物を活用した商品開発、販売戦略の検討、実践に関する助言を行う。
4. 静岡県農泊ネットワーク設立会議	2024年1月～現在に至る	農泊実施地域選定会議の専門家として、農泊の推進、農泊地域の選定などに関する助言を行う。
4 その他		

研究業績等に関する事項

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1. SDG s と農業体験	共著	2022年3月	鈴木滋彦編「農林業の魅力と専門職大学」筑波書房, 224-225	生産者と消費者が農業体験を通じてお互いに学ぶことで、安全で安心できる農産物の生産や環境に配慮した農業生産を行う生産者の育成と、その生産者が持続的に生産活動を行える価格で買い支える消費者の育成につながる。このように環境や人に十分な配慮がなされた農産物を選択して適正な価格で購入することをエシカル消費と呼び、近年国内でも普及しつつある。これらの取り組みと、SDG s (特に目標12「つくる責任・つかう責任」) の関りについて紹介した。

<p>(学術論文)</p> <p>1. 大豆及びほうれん草のミネラル含量の変動について</p>	<p>共著</p>	<p>2005年</p>	<p>NMCC共同利用研究成果報文集13号(2005年),186-190</p>	<p>農作物の微量元素含量は品種、生産地、季節などの様々な栽培要因によって変動することが指摘されている。そこでPIXEを利用して、大豆およびほうれん草における微量元素を分析比較し、品種、生産地、季節の違いを検討した。 本人担当部分：P186～190の執筆、実験結果の取りまとめ 共著者：吉村親、赤澤典子、世良耕一郎、伊藤じゅん、駒木玲子、佐川了</p>
<p>2. 農業・農村体験学習における学習過程と意識変容—北海道の「農業小学校」を事例に— (修士論文)</p>	<p>単著</p>	<p>2008年3月</p>	<p>北海道大学大学院教育学研究科</p>	<p>本研究では継続的な農業・農村体験学習の実践事例として北海道3カ所の「農業小学校」を取り上げ、その学習過程を分析し、農業者と参加者(大人、子ども)がどのようなことを学びながら意識を変化させていくかを検討した。その結果、農家が教え都市住民が学ぶという一方的な関係ではなく、農家と都市住民の「相互学習」の関係があることを明らかにした。この関係は、農家と都市住民がお互いの生活を支えあう関係でもあった。</p>
<p>3. 農業・農村体験における相互学習</p>	<p>単著</p>	<p>2022年6月</p>	<p>静岡県立農林環境専門職大学・静岡県立農林環境専門職大学短期大学部「アグリフォーレ・レポート」第2号, 51-54</p>	<p>食と農業・農村における課題の解決に向けては、都市住民が実際に農村地域に足を運び、農業・農村体験として農業、食、自然や農家とのふれ合いから、農業・農村や食の実態について学ぶ必要がある。参考事例とした農業小学校では、消費者が農村地域に継続的に通いながら農業・農村体験を行う。この過程で参加者だけではなく生産者も農業・農村や食の現状をふり返り、意識の変化を促すなど相互学習の関係が確認できた。今後は、相互学習の更なる分析と農業・農村体験学習が地域づくりに発展するプロセスの分析を重ね、その知見を各地の農業・農村体験の活動支援に活かしていく必要がある。</p>
<p>(その他)学会発表</p> <p>1. 大豆及びほうれん草のミネラル含量の変動について</p>	<p>共著</p>	<p>2006年5月</p>	<p>(社)日本アイソトープ協会仁科記念サイクロトロンセンター岩手医科大学サイクロトロンセンター主催「NMCC共同利用研究成果発表会」</p>	<p>農作物の微量元素含量は品種、生産地、季節などの様々な栽培要因によって変動することが指摘されている。そこで、PIXEを利用して、大豆およびほうれん草における微量元素を分析比較し、品種、生産地、季節の違いを検討した結果を発表した。 吉村親、赤澤典子、世良耕一郎、伊藤じゅん、駒木玲子、佐川了</p>
<p>2. 都市農村交流における地域住民の学習—「農業小学校」の実践を事例に—</p>	<p>単著</p>	<p>2007年6月</p>	<p>日本社会教育学会東北・北海道研究集会</p>	<p>現在農村地域で行われているグリーン・ツーリズムや各種農業体験の取り組みの中には一過性のものが多いが、その中でも継続的な取り組みの1つとして「農業小学校」が挙げられる。そこで、農業小学校の内容と意義、参加者の概要などの調査結果を発表した。</p>
<p>3. 農業・農村体験における農業者の学習過程と意識変容</p>	<p>単著</p>	<p>2008年11月</p>	<p>第56回日本農村生活研究大会</p>	<p>農業・農村体験の分析は都市住民(とりわけ子ども)が中心で、農業者についてはほとんどみられない。そこで、農業者が農業・農村体験の指導を通して都市住民と交流する中で、どのような学習や意識変容の過程を経て農業経営を変化させたかについて発表した。</p>

<p>(その他)教育実践発表 1.「早く子どもたち(大豆)が育ちますように」～旭丘高校「農業」の取り組み～</p>	<p>単著</p>	<p>2008年7月29日～31日</p>	<p>第39回全国私学夏季研究集会</p>	<p>新名学園旭丘高等学校新任公開研究授業(2008年5月22日)、新任公開研究授業合評会(2008年6月24日)の内容を中心に、「農業」の授業実践の概要や教材選定理由、今後の課題などの発表を行った。</p>
<p>(その他)雑誌等記事 1.農家が子どもに頼られる地域の先生を目指して研修</p>	<p>単著</p>	<p>2007年4月</p>	<p>北海道開発部「石狩・空知をむすぶ おむすび通信」第12号, 7</p>	<p>2007年2月23～24日に開催された「農業農村体験学習指導者養成北海道講座」(主催:社団法人全国青少年教育振興会、そらちDEい〜ね)の研修内容についての報告。「子どもに頼られる地域の先生を目指して」のテーマのもと、農家、行政、研究機関等94名が参加して、農業体験の実践や考え方について学んだ。講師からは、農業の体験を幼児期等早い段階から継続的に行うことや、継続的な取り組みを行うには個人だけでは難しいことから関係機関等と連携することの必要性等について説明があり、参加者たちが熱心に学んでいた様子について報告した。</p>
<p>2.グリーン・ツーリズムと農産物市場</p>	<p>単著</p>	<p>2008年10月</p>	<p>北海道協同組合通信社「ニューカントリー」2008年11月号, 78-79</p>	<p>グリーン・ツーリズムの中でも継続的な農業・農村体験の1例を取り上げ、その取り組みによる都市農村交流の効果、農産物流通・農業経営への影響について触れ、各種グリーン・ツーリズムにおける行政などの支援体制や大学などの研究機関による効果分析の必要性について述べた。</p>
<p>3.いわてアグリフロンティアスクールにおける経営感覚を持った先進的な農業経営者の育成</p>	<p>単著</p>	<p>2019年4月</p>	<p>岩手県農業改良普及協会「農業普及」2019年4月号, 24-25</p>	<p>経営感覚・企業家マインドを持って、経営革新に取り組む先進的な農業経営者を育成することを教育理念とした「いわてアグリフロンティアスクール(以下、IAFS)」について紹介した。IAFSには、先進的な農業経営者を育成するコース、6次産業化推進に関する人材を育成するコース、農村地域のリーダーを育成するコースがあり、修了者にはアグリ管理士の資格が授与される。修了生は、習得した知識・技術を生かし、経営規模の拡大や6次産業化等の経営発展に取り組んでいるほか、各種研修会の講師や集落営農組織の役員を務めるなど、本県農業をけん引する人材として多方面で活躍している。</p>